

ビジンプロ錠 15mg

ビジンプロ錠 45mg

に係る医薬品リスク管理計画書

ファイザー株式会社

ビジンプロ錠 15mg

ビジンプロ錠 45mg

に係る医薬品リスク管理計画書 (RMP) の概要

販売名	ビジンプロ錠 15mg ビジンプロ錠 45mg	有効成分	ダコミチニブ水和物
製造販売業者	ファイザー株式会社	薬効分類	874291
提出年月日		令和6年7月30日	

1.1. 安全性検討事項		
【重要な特定されたリスク】	【重要な潜在的リスク】	【重要な不足情報】
間質性肺疾患	肝機能障害	なし
重度の下痢	生殖毒性および発達毒性	
重度の皮膚障害	低カリウム血症	
	角膜障害	
1.2. 有効性に関する検討事項		
なし		

↓上記に基づく安全性監視のための活動

2. 医薬品安全性監視計画の概要
通常の医薬品安全性監視活動
追加の医薬品安全性監視活動
特定使用成績調査
3. 有効性に関する調査・試験の計画の概要
なし

各項目の内容は RMP の本文でご確認下さい。

↓上記に基づくリスク最小化のための活動

4. リスク最小化計画の概要
通常のリスク最小化活動
追加のリスク最小化活動
なし

医薬品リスク管理計画書

会社名：ファイザー株式会社

品目の概要			
承認年月日	2019年1月8日	薬効分類	874291
再審査期間	8年	承認番号	23100AMX00002000 23100AMX00003000
国際誕生日	2018年9月27日		
販売名	ビジンプロ錠15 mg ビジンプロ錠45mg		
有効成分	ダコミチニブ水和物		
含量及び剤形	ビジンプロ錠15 mg : 1錠中にダコミチニブ水和物15.576 mg (ダコミチニブとして15 mgを含有) ビジンプロ錠45 mg : 1錠中にダコミチニブ水和物45.729 mg (ダコミチニブとして45 mgを含有)		
用法及び用量	通常, 成人にはダコミチニブとして1日1回45 mgを経口投与する。なお, 患者の状態により適宜減量する。		
効能又は効果	EGFR遺伝子変異陽性の手術不能又は再発非小細胞肺癌		
承認条件	医薬品リスク管理計画を策定の上, 適切に実施すること。		
備考	2020年9月1日付でファイザー株式会社からファイザー・ファーマシューティカルズ株式会社へ製造販売承認を承継し, 同日, ファイザー・ファーマシューティカルズ株式会社からファイザー株式会社へ社名変更した。		

変更の履歴

前回提出日：
2023年1月12日

変更内容の概要：

1. 「2. 医薬品安全性監視計画の概要」の「追加の医薬品安全性監視活動」の「特定使用成績調査」の「実施予定期間」を変更
2. 「5.1. 医薬品安全性監視計画の一覧」の「追加の医薬品安全性監視活動」の「特定使用成績調査」の「報告書の作成予定日」を変更
3. 特定使用成績調査の実施計画書および実施要綱を改訂（添付資料）
4. 特定使用成績調査の調査票を変更（軽微な変更）（添付資料）

変更理由：

1. 実施計画書を変更し、登録期間および調査期間を延長したため
2. 実施予定期間の変更に伴い報告書の作成予定日に変更となったため
3. 実施予定期間等の変更を行ったため（添付資料）
4. 調査票内の記載整備を行ったため（軽微な変更）（添付資料）

1. 医薬品リスク管理計画の概要

1.1. 安全性検討事項

重要な特定されたリスク	
間質性肺疾患	
	<p>重要な特定されたリスクとした理由：</p> <p>本剤の臨床試験において間質性肺疾患が認められており、かつ日本人患者における発現率が高かったこと、および他の上皮成長因子受容体（以下、EGFR）チロシンキナーゼ阻害薬で間質性肺疾患が認められており、特に注意を要する有害事象とされていることから設定した。</p> <p>ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された非小細胞肺癌（以下、NSCLC）患者（以下の試験に含まれる：A7471001 試験，A7471002 試験，A7471003 試験，A7471005 試験，A7471009 試験，A7471011 試験，A7471014 試験，A7471017 試験，A7471028 試験およびA7471050 試験）において、因果関係を問わないおよびダコミチニブと関連がある間質性肺疾患の発現頻度は、全集団ではそれぞれ 1.6%（24/1473 例）および 1.2%（18/1473 例），日本人集団ではそれぞれ 5.9%（6/101 例）および 5.9%（6/101 例）であった。因果関係を問わない Common Terminology Criteria for Adverse Events（CTCAE）Grade 3 以上の間質性肺疾患の発現頻度は、全集団では 0.5%（8/1473 例），日本人集団では 1.0%（1/101 例）であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った間質性肺疾患の発現頻度は、全集団では 0.7%（10/1473 例），日本人集団では 5.0%（5/101 例）であった。</p> <p>データカットオフ日：2016 年 7 月 29 日</p>
	<p>医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none">• 通常の医薬品安全性監視活動• 追加の医薬品安全性監視活動として、以下を実施する。<ol style="list-style-type: none">1. 特定使用成績調査 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none">• 本剤の臨床試験において間質性肺疾患が認められており、かつ日本人患者における発現率が高かったこと、および他の EGFR チロシンキナーゼ阻害薬で間質性肺疾患が認められており、特に注意を要する有害事象とされていることから、特定使用成績調査において、間質性肺疾患のリスク要因を評価する。

	<p>リスク最小化活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「警告」、「用法及び用量に関連する注意」、「重要な基本的注意」、「特定の背景を有する患者に関する注意」、「重大な副作用」の項および患者向医薬品ガイドに記載し注意喚起する。 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 医療従事者および患者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。
<p>重度の下痢</p>	
	<p>重要な特定されたリスクとした理由：</p> <p>本剤の臨床試験において重度（CTCAE Grade 3 以上）の下痢が認められていることから重要な特定されたリスクとして設定した。</p> <p>ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者において、因果関係を問わない全集団での重度（CTCAE Grade 3 以上）の下痢の発現頻度は、11.7%（173/1473 例）、ダコミチニブと関連がある重度の下痢の発現頻度は、11.5%（169/1473 例）であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った全集団での重度（CTCAE Grade 3 以上）の下痢の発現頻度は、0.4%（6/1473 例）であった。</p> <p>データカットオフ日：2016 年 7 月 29 日</p>
	<p>医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常の医薬品安全性監視活動 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 承認申請時の臨床試験において重度の下痢に関する一定の情報が得られていることから、通常の医薬品安全性監視活動により情報収集を行う。
	<p>リスク最小化活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「用法及び用量に関連する注意」、「重大な副作用」の項および患者向医薬品ガイドに記載し注意喚起する。 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 医療従事者および患者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。

重度の皮膚障害

重要な特定されたリスクとした理由：

本剤の臨床試験において重度（CTCAE Grade 3 以上）の皮膚障害が認められていることから重要な特定されたリスクとして設定した。

ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者において、因果関係を問わない全集団での重度（CTCAE Grade 3 以上）の皮膚障害の発現頻度は 15.3%（226/1473 例）、ダコミチニブと関連がある重度（CTCAE Grade 3 以上）の皮膚障害の発現頻度は 15.1%（223/1473 例）であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った全集団での重度（CTCAE Grade 3 以上）の皮膚障害の発現頻度は、0.9%（13/1473 例）であった。

データカットオフ日：2016 年 7 月 29 日

医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：

【内容】

- 通常の医薬品安全性監視活動

【選択理由】

- 承認申請時の臨床試験において重度の皮膚障害に関する一定の情報が得られていることから、通常の医薬品安全性監視活動により情報収集を行う。

リスク最小化活動の内容及びその選択理由：

【内容】

- 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「用法及び用量に関連する注意」、「重大な副作用」の項および患者向医薬品ガイドに記載し注意喚起する。

【選択理由】

- 医療従事者および患者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。

重要な潜在的リスク

肝機能障害

重要な潜在的リスクとした理由：

他の EGFR チロシンキナーゼ阻害薬で肝機能障害が認められている。また、以下のとおり本剤の臨床試験においても肝機能障害が認められていることから重要な潜在的リスクとして設定した。

ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者において、因果関係を問わない全集団での肝機能障害の発現頻度は 7.6% (112/1473 例) , ダコミチニブと関連がある肝機能障害の発現頻度は 6.2% (92/1473 例) であった。因果関係を問わない CTCAE Grade 3 以上の肝機能障害の全集団での発現頻度は、 1.2% (18/1473 例) であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った肝機能障害の全集団での発現頻度は、 0.3% (5/1473 例) であった。

化学療法歴のない EGFR 遺伝子変異陽性の切除不能な進行・再発の NSCLC を対象とした A7471050 試験において、ダコミチニブとの因果関係を問わない全集団での肝機能障害の発現頻度は 30.4% (69/227 例) , ダコミチニブと関連がある肝機能障害の発現頻度は 28.6% (65/227 例) であった。因果関係を問わない CTCAE Grade 3 以上の肝機能障害の全集団での発現頻度は、 2.2% (5/227 例) であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った肝機能障害の全集団での発現頻度は、 0.4% (1/227 例) であった。また、対照群（ゲフィチニブ群）におけるゲフィチニブとの因果関係を問わない全集団での肝機能障害の発現頻度は 45.5% (102/224 例) , ゲフィチニブと関連がある肝機能障害の発現頻度は 42.9% (96/224 例) であった。ゲフィチニブとの因果関係を問わない CTCAE Grade 3 以上の肝機能障害の全集団での発現頻度は、 12.1% (27/224 例) であった。因果関係を問わないゲフィチニブの投与中止に至った肝機能障害の全集団での発現頻度は、 3.1% (7/224 例) であった。

データカットオフ日：2016年7月29日

医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：

【内容】

- 通常の医薬品安全性監視活動

【選択理由】

- 承認申請時の臨床試験において CTCAE Grade 3 以上の発現頻度が低かったことから、通常の医薬品安全性監視活動により情報収集を行う。

リスク最小化活動の内容及びその選択理由：

【内容】

- 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「重要な基本的注意」, 「重大な副作用」の項および患者向医薬品ガイドに記載し注意喚起する。

【選択理由】

- 医療従事者および患者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。

生殖毒性および発達毒性	
	<p>重要な潜在的リスクとした理由： 本剤の非臨床試験において、以下の所見が認められていることから重要な潜在的リスクとして設定した。 妊娠ラットに本剤 5 mg/kg/日（AUC に基づく用量比較で臨床曝露量の約 2.5 倍）を投与したときに、胎児の重量減少が認められている。また、雌ラットに本剤 0.5 mg/kg/日（AUC に基づく用量比較で臨床曝露量の約 0.3 倍）以上を 6 ヶ月間反復投与したとき、本剤の薬理作用と考えられる子宮頸部および膈の上皮の萎縮が認められている。 なお、臨床試験ではダコミチニブによる発達毒性を示唆する有害事象は報告されていない。</p> <p>データカットオフ日：2016 年 7 月 29 日</p>
	<p>医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常の医薬品安全性監視活動 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 承認申請時の臨床試験において発現が認められなかったことから、通常の医薬品安全性監視活動により情報収集を行う。
	<p>リスク最小化活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「生殖能を有する者」、「妊婦」、「その他の注意」の項および患者向医薬品ガイドに記載し注意喚起する。 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 医療従事者および患者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。
低カリウム血症	
	<p>重要な潜在的リスクとした理由： 本剤の臨床試験において、以下のとおり低カリウム血症が認められており、重篤な低カリウム血症が 1 例に発現していることから、重要な潜在的リスクとして設定した。</p> <p>ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者において、因果関係を問わない全集団での低カリウム血症の発現頻度は 5.2%（77/1473 例）、ダコミチニブと関連がある低カリウム血症の発現頻度は 2.2%（33/1473 例）であった。因果関係を問わない CTCAE Grade 3 以上の低カリウム血症の全集団での発現頻度は、2.2%（33/1473 例）であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った低カリウム血症の全集団での発現頻度は、0.1%（1/1473 例）であった。因果関係を問わない重篤な低カリウム血症の全集団での発現頻度は、0.1%（1/1473 例）であった。</p> <p>データカットオフ日：2016 年 7 月 29 日</p>

	<p>医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常の医薬品安全性監視活動 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 承認申請時の臨床試験において重篤な事象の発現頻度が低かったことから、通常の医薬品安全性監視活動により情報収集を行う。
	<p>リスク最小化活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「その他の副作用」の項に記載し注意喚起する。 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 医療従事者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。
<p>角膜障害</p>	
	<p>重要な潜在的リスクとした理由：</p> <p>本剤をラットに 0.5 mg/kg/日以上およびイヌに 1 mg/kg/日以上（いずれも AUC に基づく用量比較で臨床曝露量の約 0.3 倍）を反復投与したときに、本剤の薬理作用と考えられる角膜の変化（上皮萎縮，浮腫，潰瘍等）が認められている。</p> <p>以下に示すとおり本剤の臨床試験では角膜障害の発現頻度は低いものの、重篤な角膜障害が認められていること、および他の EGFR チロシンキナーゼ阻害薬においても重篤な角膜障害が認められていることから、重要な潜在的リスクとして設定した。</p> <p>ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者において、因果関係を問わない全集団での角膜障害の発現頻度は 1.2%（17/1473 例）、ダコミチニブと関連がある角膜障害の発現頻度は 1.0%（15/1473 例）であった。因果関係を問わない CTCAE Grade 3 以上の角膜障害の発現頻度は、全集団では 0.2%（3/1473 例）であった。因果関係を問わないダコミチニブの投与中止に至った角膜障害の全集団での発現頻度は、0.1%（1/1473 例）であった。因果関係を問わない重篤な角膜障害の全集団での発現頻度は、0.1%（2/1473 例）であった。</p> <p>データカットオフ日：2016 年 7 月 29 日</p>
	<p>医薬品安全性監視活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 通常の医薬品安全性監視活動 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 承認申請時の臨床試験において重篤な事象の発現頻度が低かったことから、通常の医薬品安全性監視活動により情報収集を行う。

	<p>リスク最小化活動の内容及びその選択理由：</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none">• 通常のリスク最小化活動として、電子添文の「その他の副作用」の項に記載し注意喚起する。 <p>【選択理由】</p> <ul style="list-style-type: none">• 医療従事者に対して確実な情報提供を行い、リスクに関する理解を促すため。
--	--

重要な不足情報

該当なし

1.2. 有効性に関する検討事項

該当なし

2. 医薬品安全性監視計画の概要

通常の医薬品安全性監視活動	
通常の医薬品安全性監視活動の概要： 副作用，文献・学会情報および外国措置報告等の収集，評価，分析に基づく安全対策の検討（および実行）	
追加の医薬品安全性監視活動	
特定使用成績調査	
	<p>【安全性検討事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 間質性肺疾患 <p>【目的】</p> <p>本剤の製造販売後の使用実態下において，EGFR 遺伝子変異陽性の手術不能又は再発非小細胞肺癌患者を対象に間質性肺疾患のリスク要因の検討を行う。</p> <p>【実施計画案】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 実施予定期間 <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査期間：2019年7月～2026年3月（81ヵ月） ・ 登録期間：2019年7月～2025年3月（69ヵ月） ➤ 目標症例数 <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全性評価対象例数：799例 ➤ 観察期間：52週間 ➤ 調査方式：中央登録方式 <p>【実施計画の根拠】</p> <p>症例数の設定根拠： ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者の日本人集団における因果関係を問わない間質性肺疾患の発現頻度は 5.9%（6/101 例）であった。本剤の使用実態下における間質性肺疾患のリスク要因の影響を評価するため，リスク要因の有無による部分集団間で統計的に有意な相対リスクを検出できる症例数を設定した。低リスク集団および高リスク集団における間質性肺疾患の発現頻度をそれぞれ 5.9% および 11.8%（2.0 の相対リスクに相当），低リスク集団と高リスク集団の症例数の比を 1：3 と仮定した場合，有意水準（両側）15%，検出力 80% の下でリスク要因を検出可能な症例数は 799 例となる。登録された患者のうち，10% の症例が何らかの理由により安全性評価対象から除外されると仮定し，登録症例数を 888 例とした。</p> <p>観察期間の設定根拠：</p>

ダコミチニブ 45 mg QD を開始用量として単剤投与された NSCLC 患者において、本剤投与開始日から間質性肺疾患の発現日までの日数（最大値）は日本人集団および全集団でそれぞれ 111 日および 238 日であり、また、間質性肺疾患の CTCAE 全 Grade において 90 日ごとの発現率および初回発現率は一貫して低かった。本調査の目的である間質性肺疾患に対するリスク要因の検討では、多くの間質性肺疾患の発現症例を集積する必要があるため、間質性肺疾患の発現は 52 週以内に認められているため、本調査の観察期間を 52 週間と設定した。

【節目となる予定の時期及びその根拠】

安全性定期報告時：

本調査の安全性検討事項に係る事象の発現状況等を定期的に確認し、包括的な安全性の検討ならびに報告を行うため。

調査終了時および再審査申請時：

本調査の結果について、最終的な安全性の検討ならびに報告を行うため。

【当該医薬品安全性監視活動の結果に基づいて実施される可能性のある追加の措置及びその開始の決定基準】

節目となる時期に、以下の内容を含めた医薬品リスク管理計画書（RMP）の見直しを行う。

- ・ 本調査の安全性検討事項（間質性肺疾患）に対するリスク最小化活動の内容変更要否について検討を行う。

3. 有効性に関する調査・試験の計画の概要

該当なし

4. リスク最小化計画の概要

通常のリスク最小化活動

通常のリスク最小化活動の概要：

電子添文および患者向医薬品ガイドによる情報提供

5. 医薬品安全性監視計画、有効性に関する調査・試験の計画及びリスク最小化計画の一覧

5.1. 医薬品安全性監視計画の一覧

通常の医薬品安全性監視活動				
副作用，文献・学会情報および外国措置報告等の収集，評価，分析に基づく安全対策の検討（および実行）				
追加の医薬品安全性監視活動				
追加の医薬品安全性監視活動の名称	節目となる症例数 ／目標症例数	節目となる 予定の時期	実施状況	報告書の 作成予定日
市販直後調査	該当なし	販売開始から 2, 4, 6 ヶ月後	終了	作成済（2019 年 10 月提出）
特定使用成績調査	最終目標症例数：安 全 性解析対象症例数と し て 799 例	安全性定期報告時， 調査終了時および再 審査申請時	実施中	・安全性定期 報告書として 作成する。 ・最終報告書 として調査終 了時に作成す る（2026 年 12 月予 定）。

5.2. 有効性に関する調査・試験の計画の一覧

有効性に関する調査・試験の名称	節目となる症例数 ／目標症例数	節目となる 予定の時期	実施状況	報告書の 作成予定日
該当なし				

5.3. リスク最小化計画の一覧

通常のリスク最小化活動		
電子添文および患者向医薬品ガイドによる情報提供		
追加のリスク最小化活動		
追加のリスク最小化活動の名称	節目となる 予定の時期	実施状況

市販直後調査による情報提供	販売開始から2, 4, 6ヵ月後	終了
---------------	------------------	----